

イギリスの貴族について(V)

松原正道

序

王位継承を巡るバラ戦争により貴族同士が消耗し合い、そこから誕生したチューダー朝は、国内での政権基盤固めのため、創始者たるヘンリーHenry 7世(1457-1509, 在位1485-)はその在世中、如何にその立場を堅固にするかと言うことを最大の課題にしたが、そのことは国際的にも言えることであった。時恰も、ルネサンスの盛りであったが、ヨーロッパの辺縁の地イギリス(イングランド)では、未だ時早く、次の時代に花開くことになる。それに比べ宗教改革の動きは逸早くその風潮をもたらしたと言える。

そうした立場から列強に伍していくことができるようになったことについて、色々な要因が挙げられるが、中でも、歴代の王達が人材を巧みに活用したと言うことをその主要なものとして指摘することができるので、本稿では、ヘンリーHenry 8世(1491-1547, 在位1509-)、エリザベスElizabeth 1世(1533-1603, 在位1558-)を中心に、チューダー朝における人材活用が如何になされ、その中で、そこに登場した者達が、如何なる動きを示したかと言う人間模様に焦点を当てながらチューダー朝が如何なる時代であったかを探るものである。そして、そこに、ディズレーリBenjamin Disraeli, 1st Earl of Beaconsfield(1804-81)の言う「真の貴族」Real Aristocracy⁽¹⁾、即ち、門地門閥がなくとも、自身に資質があれば国家枢要の地位を得ることができるとする考え方が存在することを知ろうとするものである。

本論

I

ルネサンス、宗教改革、地理上の発見(大航海時代)を以て近代の幕開けとすることは歴史の示すところであり、それぞれは、多少のずれはあるものの互いに刺激し合いヨーロッパ

に近代化をもたらした。

西洋史研究のうえで、中世と近代を画する時として、1453年と言う年が挙げられる。西欧で百年戦争が終結、東欧では、古代以来の東ローマ（ビザンティン）帝国がオスマン・トルコによりその命脈を絶たれた年である。

固より、この年を以てヨーロッパが須く近代化されたとは言えず、既に、以前からその兆しが見られた面もあれば、その後も、長い間に亘り、中世の特徴である封建制の浅滓を色濃く残している部分もある。歴史研究の上で、時代を区分することが難しいのは、中世と近代のそれにも言えるのであるが、1453年を以てその区切りとすることは大方の認めるところである。

そして、又、1492年と言う年もひとつの転機をなした年と言える。フェルナンド Fernando 5 世 (1452-1516, 在位アラゴン王1479-, スペイン王1479-) とイサベル Isabel 1 世 (1451-1504, 在位カスティリア女王1474-) の結婚 (1469) によって一つのスペインが成立 (1479)、中世を通し長年に亘りイベリア半島等南ヨーロッパを支配していたイスラム教徒を本拠地グラナダから追い国土回復 Reconquista を行った年である。勢いの赴くところ、コロンブス Christopher Columbus (1446頃-1506) の航海を援助、新大陸が発見された年でもある。これは既に知られていた地球々体説に基づく行動であり、西へ進めばアジアへ到達でき、富と名声を求める者達に海外雄飛を促したが、それと同時に、科学上の新知識を結果的に実証したことにもなった。そして、それは、マゼラン Ferdinand Mazellan (1480頃-1521) の一行による世界周航 (1522) によって完全なものとなる。

又、天才的外交手腕を以て微妙な立場のイタリアを列強の間で巧みに均衡を保たせていたフィレンツェの支配者ロレンツォ・デ・メディチ Lorenzo de Medici (1449-92) の死んだ年であり、以後、イタリアは混迷の度を深めるのであるが、それに大きく介在したのが教皇アレクサンデル Alexander 6 世 (1431-1503, 在位1492-) であり、この年は彼の即位した年でもある。

15世紀末、文化的に最も進み華かな都市はヴェネツィア、フィレンツェ、ミラノ、ナポリとキリスト教の中心地ローマと言ったイタリアの諸都市で、ここに起ったルネサンスは、物事を理性を以て判断し理解すると言う人間中心主義 Humanism を根底に展開され、周辺の国々へ影響を与えるのだが、滅亡したビザンティン帝国からの学者達が伝えた異教の文化であるギリシアやローマの古典を受容、これを理想化、又、隣接するイスラム世界の高い文化の流入がそこに大きな役割を果たしたのである。

だが、政治的には各都市が対立抗争を繰り返し、そこに周辺のフランス、神聖ローマ帝国、スペインと言った国々が干渉を加え、それを排除するためとは言え、ユリウス Julius 2 世 (1443-1513, 在位1503-) の如く教皇自ら兵を率いて戦うと言うように、恰も、戦国時代

の様相を呈していた。こうしたイタリアの現状を憂いて、フィレンツェ共和政府で働いたが、晩年は不遇をかこち、その中で執筆活動からイタリアを救済する手引書とも言うべき『君主論』(1532刊)を書いたマキアヴェリNiccolo Machiavelli (1469-1527)は力量のある君主によって国土が統一されなければイタリアは救われないと主張。「目的のためには手段を選ばず」と読み取られ、「マキアヴェリズム」なる言葉を生んだ執筆内容は多くの人々に色々な意味で影響を与えた。

ランカスター、ヨーク両家の王位を巡るバラ戦争において、ボズワースの野でヨーク家出身のリチャードRichard 3世(1452-85, 在位1483-)を討ち取り、テューダー朝を興したヘンリーHenry 7世(1457-1509, 在位1485-)⁽²⁾は、古来、正統とは別に力量のある者を王に戴くと言う風潮があったとは言え、リッチモンド伯エドモンド・テューダーEdmond Tudor, Earl of Richimond (1430頃-56)の子で、母マーガレット・ボーフォートMargaret Beaufort (1443-1503)の系統からランカスター家に連なると言う些か見劣りする自らを省みて、政権維持に心を砕いた。

国内の整備は急を要し、そのために結婚を通しての宥和策を採り、自らヨーク家のエドワードEdward 4世(1442-83, 在位1461-)の娘エリザベス(1465-1503)と結婚、ヨーク派の反対を抑えることに腐心、宿敵同士の結びつきながら二人の仲は良好で、男女二人ずつの子供を得た。結婚策は子供達にも採られ、それぞれイギリス(イングランド)を益すると思われる相手を選ばれた。だが、これは他の国々においても事情は同じであった。

長女マーガレット(1489-1541)はスコットランド王ジェームズJames 4世(1473-1513, 在位1488-)と結婚、この時、リンカーンシャのヨーマン出身で、亡命中のヘンリーにパリで仕え、彼の即位後、國務卿、国璽尚書となりエクセター司教を兼ねスコットランド、フランス、オランダ等を相手に外交手腕を発揮したリチャード・フォックスRichard Fox (1448頃-1528)が橋渡しの役割を担った。同様に、サリー伯トマス・ハワードThomas Howard, Earl of Surrey, 2nd Duke of Norfolk (1443-1524)が北部鎮護と国境守備に当る北方総督としてこれに尽力したが、後に、ジェームズを敗死させる主役を担うとは考えもしなかったであろう。

合併で強大化し国際政治に睨みをきかせていたスペインの王女キャサリンCatherine of Aragon (1485-1536)と長男アーサーArther (1486-1502)⁽³⁾との結婚が考えられ、1489年、婚約するが、時々政治で婚約が棚上げされる等スペインの一方的思惑で推移したが、1501年、結婚式が挙行され現実のものとなった。この時も交渉に当たったのがフォックスで、王女の興入れの際何となく面倒を見たのがバッキンガム公エドワード・スタファドEdward Stafford, 3rd Duke of Buckingham (1478-1521)だったが、後の自分の悲運について知る由もなかった。

この間、ヘンリーは、正当性を脅かす恐れのあるヨーク家に連なる者達を始末するという周到さを見せている。

結婚の成立はスペインとの絆を強め、国際的地位を向上させはするが、曾て、イタリアにおいてスペインが主となった対仏同盟で等閑視されたことを考えると安心はできず、この後もフェルナンドとの間に度重なる掛け引きが行われ、それはヘンリー8世(1491-1547、在位1509-)まで続くのであった。アーサーの死後は、弟のヘンリー(8世)との結婚が考えられたが、スペインが未払いの持参金の残りを結着させるまで態度をはっきりさせるわけにはゆかなかった。

スペイン側にも問題があった。男子の後継者がいないため、神聖ローマ帝国のマクシミリアンMaximilian 1世(1459-1519、在位1509-)の息子でオーストリア大公兼ガスコーニュ公フィリップPhilip(1478-1506)と娘のファナJuana(1479-1555)との子カールKarl(1500-58、在位スペイン王1516-56、神聖ローマ皇帝1519-56)が継ぐことになった。それはハプスブルグ家の強大化を意味し好ましいことではなかった。

そして、ヘンリーの吝嗇とも言える財政策と商工業の育成は国力を充実させ、そうしたイギリスに神聖ローマ帝国やフランスから誘いがかかっており、両国はキャサリンを間に挟んで虚々実々の掛け引きをするのである。

その中で、王妃エリザベスが産後の肥立ちの悪さから急死、生まれた子も母を追った。落胆したヘンリーではあるが、唯一の王子ヘンリーに万一のことがあるとイギリスは再び王位を巡って混乱するとして、自らキャサリンと結婚することを考えたが、スペインの強い反対で沙汰止みとなった。その後も、両者の掛け引きは続くが、ヘンリーの死で、キャサリンの問題を残したまま終結した。1509年4月21日、ヘンリー7世は52年の波乱に満ちた人生を閉じ、18才のヘンリー8世が後を継ぐことになる。

ヘンリー7世の24年間の治世は反テューダーの気分が残り、そのためにヨーク派貴族の所領を没収し王領地を拡大したり、「仕着せ」や「訴訟幫助」を禁じ封建貴族の勢力減殺、社会秩序回復のため星室裁判所を整備、枢密顧問会議を充実させ内閣の如き機能を持たせた。それはエリザベス1世(1533-1603、在位1558-)の時に役割を果たす。財政の健全化のため商工業を保護・奨励する一方、リチャード・エンブソンSir Richard Empson(1501没)やエドモンド・ダッドリーEdmund Dudley(1510没)を財産管理人として苛斂誅求を行ったため国庫は潤う。ところが、彼らは若きヘンリー8世によって私腹を肥やしたと言うことで処刑されることになる。

そして、バラ戦争で半分近くに減った貴族の数を増やさず、国政の重要な官職は王子達に就け、実務は責任を負わせられた貴族にさせ、好きな時に彼らを排除できる体制を作り、貴族達の骨抜きを計った。一方では、後のバッキンガム公エドワード・スタッファド、チャー

ルズ・ブランドンCharles Brandon, Duke of Suffolk (1545没) やトマス・ロベルThomas Lovell (1524没) 等を側近として登用。後に、ヘンリー 8 世に重用され辣腕を振るうトマス・ウルジーThomas Wolsey (1473頃-1530) はヘンリーの死の 2 年前に召し抱えられ、又、同じく次の時代に頭角を現すトマス・モアThomas More (1485-1535) もこの時代議会入りしたが、王女マーガレットの結婚に際しヘンリーが過大な要求をしたのに反対したためその地位を失っている。

II

1509年6月24日、ヘンリー 8 世⁽⁴⁾はキャサリンと共に戴冠した。二人は6月11日に結婚式を挙げていた。

ヘンリーは兄の妻で6才年長のキャサリンに好意を持っていた。兄の死後は父の意向もあり会うことは儘ならなかったが、即位するや結婚を決意、自ら取り仕切り、ヘンリー 7 世に遠慮してキャサリンに近づくとしなかった宮廷人達を驚かせた。二人の仲は睦まじく、献信的なキャサリンがイギリスへ来て8年間の労苦の末に擱んだ幸せであり、それを満喫すると共に年若い夫の良き理解者として、時に母親のような役割をも果たした。だが、この献信的な態度が後に二人の間に溝を作ることにもなるのである。

幸せな家庭を持つヘンリーの若さと華かさは国内に清新な空気を漲らせた。父の時と違い正当性を脅かす者もなく、多少の問題はあっても、慎重な父による国力の充実は内外に平和を保たせており、父が悩まされたフェルナンドとの関係もキャサリンと結婚したことで平静を保っていた。

ヘンリーは父の意向もあって幼い頃から母によって、又、母の死後は祖母によって当代一流の人物に接し、ルネサンスの空気を身体全体で受け止めるという教育を受け、文芸を愛し、特に、音楽を楽しむと言う性向を持っていた。彼が接した人物の中に、桂冠詩人のジョン・スケルトンJohn Skelton (1460頃-1529)、パリでエラスムスのもとで学んだウィリアム・ブラウントWilliam Blount, 4th Baron of Mountjoy (1534没)、トマス・モア、そして、エラスムスDesiderius Erasmus (1465-1536) 等がいる。このことは、イギリスにも本格的なルネサンスの風潮が浸透してきたということになる。イタリアとは多少趣を異にして。エラスムスがモアと共に8才のヘンリーに会い好印象を得たことについての指摘がなされるが、豊かな少年時代を過したことが想像される⁽⁵⁾。

だが、歳月の流れは人を変え、心を変える。年長のキャサリンは度重なる妊娠もありその容色はおとろえ、しかも、夫が望む世継ぎが生まれる気配がなく、8年間に6人の子供を産んだが、メアリー(1世, 1516-58, 在位1553-) が残っただけであった。こうしたことか

ら、ヘンリーは兄嫁だった女性との結婚が神意に反しているのではないかと疑うようになり思い悩む。

こうした悩みはキャサリンの女官としてヘンリーに見えるアン・ブーリン Anne Boleyn (1507-36) の登場で離婚問題へと発展、その処理に当たったのがウルジー⁽⁶⁾であった。枢密顧問官からヨークの大司教を経て枢機卿と大法官 (1515) を兼ね、1518年には教皇使節の地位を得て、臣下として聖俗両方の最高の地位を異例の早さで手に入れたが、サフォークシャーのイプスウィッチに富裕とは言え肉屋の息子として生まれている。オックスフォードで学び頭角を現わし、晩年のヘンリー7世に仕えた後、引き続きヘンリー8世の臣下となったのであるが、若き君主としては、父の息のかかっている家臣よりも自ら選んだ者達を身の回りに置きたいと思うのが自然の成り行きで、そうした者達の一人ではあるが、特に、彼への重用ぶりは目を引く。

そこには、彼の有能さがヘンリーをして傾倒させるものがあつたと言えるが、そう言う人物に有りがちな独善的な傾向は、やがて、彼をして墓穴を掘らせることになる。旧時代を代表する人物とも言えるフォックスやバッキンガム公の存在は彼にとって常に気になるものであり、その一人のバッキンガム公は政争の犠牲になり処刑され (1521)、フォックスが1528年に死ぬと彼の一人舞台となり内外の政治に辣腕を振うことになる。

1519年、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世が死に、母方の祖父フェルナンドの後を継いだスペイン王カルロス1世がフランソア François 1世 (1494-1547、在位1515-) と争い皇帝位に就きカール5世となった。二人は事ある毎に争い4回に亘り戦い、その都度カールが勝利。両者の争いに巻き込まれないことがヘンリーにとっては大事で、二人に友好的態度を示し、両国の間に立ってイギリスを維持していこうと考えるヘンリーと側近のウルジーは国内に高まる親皇帝派の動き、そこには皇帝の叔母としてのキャサリンの存在があるわけだが、それを抑えるために、首謀者と言う口実を以てバッキンガム公を犠牲にしたのであるが、これは、ヘンリーとキャサリンの仲を更に悪くした。結局、カールとフランソアは戦端を開き (1521)、ヘンリーとしては中立ではいられず、妹のメアリー (1496-1533) との婚約を条件にカールに加担、フランソアが捕虜になると言うことで英・独の勝利に終わったが、ヘンリーが借金の返済を迫ったこととカールが持参金の引き渡しを要求したことが契機となり、カールがキャサリンの姪のポルトガルの王女と結婚したため二人の対立は決定的となった。このことはヘンリーとキャサリンとの間をより深刻なものとし、更に、1526年から27年に亘り行われた教皇を盟主とした神聖同盟軍とカールとの戦いの中、カールの手先となったブルボン公の兵士がローマに乱入、街を破壊した (「ローマの寇略」)。この時、スペイン人の傭兵が沢山いたと言うことで、ヘンリーのスペイン憎悪は倍加し、それは、とりもなおさず、キャサリンに向けられることになるのである。

こうして、離婚は決定的となり、これを如何に上手に処理をするかにかかってきた。ウルジーは、王の再婚後生まれるであろう男子に継承権が与えられることを考え、結婚が兄弟の妻を娶ったと言うキリスト教の教義上から見て、疑義があると言う理由を以て離婚の正当性を主張、国内で一気に解決しようと計った。ところが、結婚に反対したカンタベリー大司教ウィリアム・ウォーラムWilliam Warham (1450頃-1532) やジョン・フィッシャーJohn Fisher (1459頃-1535) が、教義上の疑義は教皇の権限内にあると主張、結局、判断を教皇クレメンスClemens 7世 (1478-1534, 在位1523-) に委ねることになった。

ヘンリーはルターMartin Luther (1483-1546) の改革運動に対し、ローマ教会を支持する文章を呈し、教皇レオLeo10世 (1475-1521, 在位1513-) から「教会の擁護者」の称号を受けていたが、クレメンス7世はカール的手中にあり、事の解決は、時の国際政治と関わっていた。

その上、国内でも、ウィリアム・ティンダルWilliam Tyndale (1492頃-1536)、マイルス・カヴァデルMiles Coverdale (1488頃-1568)、トーマス・克蘭マーThomas Cranmer (1489-1556)、ヒュー・ラティマーHugh Latimer (1485-1555) 等が、教会や修道院の在り方に疑問を呈しており、これは教会の古い体質を改めると言うことだけではなく、教皇の特権に疑問をはさむものであり、君主の在り方をも考えさせるものでもある。それは、大陸での改革の動きの影響であった。従って、ヘンリー、ウルジーの立場は微妙なもので、国際政治から見て離婚が認められることは極めて難しく、そうした中でウルジーはヘンリーと教皇との問題を解決しなければならず、離婚が成立してアンとの結婚に成功しても、キャサリンから恨まれ、カールからの攻撃はまぬがれないと共に、やがて、台頭するであろうブーリン一族からは疎まれる存在とならざるを得ず、失敗すればヘンリーの怒りを買うのは必定で、そうならば命の保証はない。

そうした中で教皇との交渉から、教皇特使ロレンツォ・カンペッジョLorenzo Campeggio (1474-1539) が派遣されてきた (1528・9)。彼は、ヘンリー、キャサリンから説明を受けたが、教皇の意向もあり結論を出そうとはせず、翌年7月、教皇は問題をローマへ移すことにした。このことは、ウルジーの失脚を意味し、以後、ヘンリーの相手を勤めるのはスティーヴン・ガーディナーStephen Gardiner (1497頃-1555) とトーマス・クロムウェルThomas Cromwell, Earl of Essex (1485頃-1540)⁽⁷⁾となった。前者は衣料商の息子として生まれ、ケンブリッジでギリシア語や法律を学び、ウルジーの側近からヘンリーに仕えるようになり離婚問題に関わり使節としてローマへ出掛け交渉に当たり、外交に手腕を発揮、「首長令」を理論的に擁護。ウィンチェスターの司教になるが、後に、メアリーMary 1世 (1516-58, 在位1553-) の時代、新教徒を迫害する。後者もウルジーに見出される。貧家に生まれ職業も定まらず諸国を放浪する中で生きる知恵を身につけたことが見出される因となり、それを契

機にヘンリーに仕え、ウルジー失脚後は大司教補佐に任じられウルジーに代る働きをするが、自身、ウルジー同様の結末を迎え、処刑される。

ウルジーは、大法官、枢機卿だったと言うことで、教皇権支持の罪で告発され、大法官職はモアが受け継ぎ、その初仕事としてウルジーの糾弾をすることになった。ヘンリーはウルジーを庇うがプーリン一族から責められ、彼の逮捕を命じ、その護送中ウルジーは病死する。時にヘンリーを上回る権勢を誇った彼も、王の寵愛を良いことに独善に走り、真の味方を得ることなく、寵愛の失せると共に失脚したのである。

ケンブリッジ大学のクランマーが離婚問題を法律問題として取り扱うことを提言、ガーディナーとフォックスが動き、内外に都合の良い意見を糾合、話は急転急下方向を変えて進んで行く。

1530年5月、議会は、ルター派迫害を決める一方、外国人である教皇の支配を拒否、翌年1月、議会とカンタベリー聖職会議が合同して、全土の聖職者をカンペッジョをイギリスに入れたと言うことで告発すると共にヘンリーをイギリス教会の首長たることを承認。次いで、「初収入税禁止法」Act in Restraint of Annates (1532)、「上訴禁止法」Act in Restraint of Appeals (1533)、「聖職者服従法」Act for the submission of the clergy (1534)を決め、イギリス国内の問題は宗教上のものと言っても全て国内で処理され、教皇とは関わりないということになった。そして、ローマの出先機関とも言うべき修道院を打ち壊し国家の優位性を確立する立法がクロムウエルを中心に枢密顧問会議で準備され、この時のクロムウエルの行動は冷徹なもので、「修道士の槌」と言われ、二度に亘りその解散がなされる(1536, 39)。こうした対ローマ強行策を取るイギリスに対し、教皇はヘンリーを破門(1534)、これに対して、議会は強硬な態度で「首長令」Act of Supremacy (1534)を通過させた。これによりイギリスでは国王を首長とした国教会Anglican Churchが成立、ローマ教会とは別の組織として編成されることになり、今後、これを更に徹底するために修道院解散がなされるのである。

ウルジーは旧秩序の中で事の解決を計ったが、クロムウエルはその枠を超えた発想を持っていたと言える。固より、それは彼独自のものではなく、大陸で起っている改革の動き、又、マキアヴェリ等に見られるローマ教会の実状に対する批判、これらがクロムウエルをして大胆な行動をとらせると共にイギリス国内に彼の政策を受け入れる素地が醸成されていたと言えるのである。ヘンリーとて、最初からこのような経過になるとは考えておらず、当初は、ウルジー同様に旧秩序の中で問題解決がなされればと考え、それは前例からすると決して不可能なことではなかった。だが、自分の置かれている時の国際政治における立場から前例通りには行かず、世界史に残る大事件への発展して結着を見ることとなったのである。そして、それは、イギリス国内のことであれば、宗教上のことであれ、俗的な問題であれヘンリーの意志で何事も結着がつけられることを意味し、このことは、他の国々においては、それぞれ

の君主とは別に、ローマの支配を受けていたことから完全に独立したことになり、まさに近代化を意味する国民国家への脱皮と言うことになる。彼自身はそこまでは意識してはいなかっただろうが。そして、王妃とは言え、一人の女性としてのキャサリンの運命は国際政治の大きな波の中で翻弄される泡沫の如きものであったが、その存在が歴史の流れを大きく変える転機となったため後世に名を残すことになった。

ヘンリーが、そうしてまでもキャサリンとの離婚に執着したと言うことにはなるが、そこには何と言っても男子の後継者を得たいと言う強い願望が介在していたからである。それ自体は旧秩序の発想であり、離婚に関わる一連の行為の中からは新しい秩序を生み出したにも拘らず、彼の発想の原点は未だ古いままであり、これは、やがて、その死後、後を継いだ娘達によって彼が思い悩んだことが全く意味がなかったと言うことが明確にされるのである。それも王朝が交代すると言う徹底した形で。そうした意味で、元来、杞憂に属するものであり、以後の歴史の中にも何人かの女王が誕生、それぞれがそれなりの役割を果し、女王の時代には栄えると言う話を残している。杞憂に属するものでもあったとは言うもののそれは飽くまでも結果論であって、この時代においてヘンリーが思い悩んだとしても不思議ではない。それにしても、犠牲になった者達は気の毒であるが。

1533年1月25日、ヘンリーとアンは結婚するが、彼女は妊娠していた。当初、武器にしていたその貞操も、余りにも長い離婚問題の解決に痺れを切らせたのと解決が間近であると言うことからヘンリーに従ったのである。5月23日、カンタベリーの大司教となっていたクランマーにより正式に離婚が宣言され、6月1日、アンは王妃として戴冠するが、キャサリンに対する国民の同情は強かった。

この間、父がウルジーと争って引退したアンの伯父の第3代ノーフォーク公トーマス・ハワードが枢密院議長に就任、アンの父トーマス・ブーリン Thomas Boleyn, Earl of Wiltshire and Ormond (1477-1539) や兄弟がヘンリーの側近となり、一方、モアが良心に反して職務を続けることができないとし辞職 (1532)、ヘンリー7世時代以来テューダー朝を支えてきたカンタベリー大司教ウォーラムが死去 (同)、ヘンリーの周囲には彼を諫める者がいなくなってきた。

1533年9月7日、アンは女兒を産んだ。エリザベスと名付けられたが、男子を望むヘンリーの失望を買い、これまでのアンの態度からヘンリーの心は彼女から離れて行った。アンとしては、男子を生んでいればヘンリーを引き止められ、国民からも支持が得られたが、今や、ヘンリーの気持次第で如何ようにもなる自分の立場に気付かされるのである。それは、この時代、ヘンリーに関わった者全てに共通することで、ヘンリーにとって利用価値がある間はこれを取り立て、ウルジーの如く、低い身分の者でも位人臣を極めることができ、そのため、自らに力があるかの如く振る舞い、それ故に多くの者を敵に回してしまう。ひと度、寵愛を

失うと、それは、ヘンリーにとって利用価値がなくなったと言うことであるが、零落の身で命を落す者、処刑される者等。これ全て、ヘンリーのその時の気持次第で、これまでがどうあったかと言うことには関わりなく、その時々には彼にどう思われているかと言うことで仕える者の命運が決まるので、そうした意味で、ヘンリー8世は、世界史上で言う絶対王政を代表する人物であると言えるだろう⁽⁸⁾。

ただ、歴史上、如何なる君主、指導者と言えども、そこには、彼らを支えるものがあってこそ、その立場を維持することができるのである。ヘンリーの場合、それをどのように求めたかと言うと、テューダー朝の正当な後継者であると言うこと、彼にとり、このことは重要で、それがためにキャサリンとの問題が起ったのであり、正当な後継者がいないと言うことは、君主の場合政治問題となり、この時代では国際問題にもなったので、彼が後継者を得たいと躍起になったのも無理からぬことである。その自らの正当性と共に、時の流れを見る眼の確かさ、ルターを始めとする者達による、教皇を中心に据えた旧秩序を肯んじない勢力の台頭、このあたりのことを巧みに判断しながら、自らの真意に反しながらも、それを政治に反映、新しく政治に関わってきた新興の者達の抛り所となりつつあった議会を活用、そこに、従来の大貴族に基づいた政治と言うのとは違い、これを牽制、枢密院のような未だ充分完成しているとは言えないが官僚機構を利用、自らの政治を行おうとしたことにあったと言える。併せて、彼自身の君主としての政治に対する意志がイギリスの在り方を決めたと言える。かなり独断的であったと言えるが。

時代の流れに従った価値観の変化、地動説の如く、まさに、コペルニクスの転回は人々に大きな動揺を与え、それは、個々人の心の支えである信仰あるいは信条の面でも言えたのである。こうした価値観の転換の中で自己の信念に従いそれぞれの価値観を持ち、成り行き上新しい価値観を持つようになったヘンリーの在り方に伴い、自らの信念に忠実であるために従容として死んで行ったフィッシャーやモア等、真に新しい価値観を持った者、保身のためにこれをした者、新しい価値観を持ちながらもヘンリーの不興を買ったクロムウエル等、様々である。

1536年1月7日、キャサリンは苦難に満ちた51年の人生を終えた。同月、アンは男の子を流産、ヘンリーはアンの女官ジェーン・シーモア Jane Seymour (1507頃-37) の元へと去って行き、アンはキャサリンの悲哀を味合う間もなく、5月19日、不貞の罪で一族の者達と共に処刑された。

1537年10月、ジェーンは待望の男子を出産、エドワードと名付けられるが、産後の肥立ちが悪く間もなく死ぬ。

ヘンリーは、その後、クレヴズのアン Anne of Cleves (1515-57)、キャサリン・ハワード (1522頃-42)、キャサリン・パー Catherine Parr (1512-48) と結婚するが、クレヴズ

のアンとは直ぐ離婚、これを取り持ったクロムウエルは叛逆罪で処刑され、キャサリン・ワードも浮気の廉で処刑、キャサリン・パーはヘンリーの死後再婚する。

ヘンリーの周囲には妻達を始め数々の人間が彼のための舞台回しを努めるが、彼らはその役割を終えると消えて行き、そこには用済みになったと言うひとつの、そして、重要な共通項がある。

1547年1月28日、イギリス史上、且つ、世界史上、大きな足跡を残したヘンリー8世はその56年の生涯を閉じた。

その後、イギリスは、エドワード6世(1537-53, 在位1547-)の短い治世とキャサリンの娘メアリー1世(1516-58, 在位1553-)のフェリペFelipe 2世(1527-98, 在位1556-)との結婚に見られるカトリックへの回帰による政治によって「血のメアリー」の治世として知られる時代を経験する。

III

1558年11月17日、メアリー1世の死でエリザベス1世の時代が到来した。彼女の最初の仕事は、サー・ウィリアム・セシルSir William Cecil, Baron Burgley (1520-98)を枢密顧問官、秘書長官に任命、これを他の枢密顧問官達に披露することであった⁽⁹⁾。

ボズワースの野でヘンリー7世のために働いた祖父デイヴィッドDavid (1541没)を持つセシルは、父リチャード(1552没)から広大な土地を譲り受けるジェントリーで、ケンブリッジのセント・ジョンズ・カレッジでギリシア語を学んだ後グレイ法学院で学び、下院入りした後、エドワード6世の攝政サマーセット公エドワード・シーモアEdward Seymour, Duke of Somerset (1506頃-52)の秘書となり、その失脚で一時投獄されるが、ノーサンバランド公ジョン・ダッドリJohn Dudley, 1st Duke of Northumberland (1502頃-53)に認められて國務卿となる。メアリーの時には職を奪われたが、エリザベスの時代になり再び要職を得たことになる。

ケンブリッジの同窓でエリザベスの家庭教師、エドワードやメアリーのラテン語秘書になり、イギリスを代表する人文主義者としてケンブリッジでギリシア語を教えたロジャー・アスカムRoger Ascham (1515-68)や最初の妻メアリー(1544没)の兄でエドワードの家庭教師になったジョン・チークSir John Cheke (1514-57)の知遇を得て新しい教養を身につけたセシルは、ケンブリッジやグレイ法学院で得た教師、友人、知己、又、結婚等による人間関係がその人生において、特に、仕事の面で大きな役割を果たしている。

そうした中に、近代西欧哲学の祖と言われ、大法官の地位についたフランシス・ベーコンFrancis Bacon, 1st Baron of Verulam, viscount of St. Albans (1561-1626)の父で、同じ

くケンブリッジ、グレイ法学院に学び、エリザベスの下で枢密顧問官となり玉璽尚書を兼ね、大法官の裁判権を行使する権限を与えられたニコラス・ベーコンSir Nicolas Bacon (1509-79) がいた。二人は共に二度目の妻としてアンソニー・クークSir Anthony Cooke (1504-76) の姉妹を娶りクーク共々義理の兄弟として親しくしており、セシルを取り巻く「ケンブリッジ・グループ」を形成。そこには、トーマス・スミスSir Thomas Smith (1513-77)、ウォルター・ハッドンWalter Haddon (1516-72)、トーマス・ウイルソンThomas Wilson (1525頃-81) がおり、マッシュウ・パーカーMatthew Parker (1504-75) も参加、更に、ジェームズ・ピルキントンJames Pilkinton (1520頃-76)、ウィリアム・グリンダルWilliam Grindal (1548没)、そして、チーク、アスカム等がセント・ジョンズ・カレッジの同窓として重要な役割を果たしており、アスカムがその中心であった⁽¹⁰⁾。

セシルを側近に起用したエリザベスは、メアリー時代の枢密顧問官に人数の多さは意見のまとまりを欠くとして縮小する旨を伝えると共に有能な人物の残留を求めた。セシルを中心に自分の周囲を固めたエリザベスにとってその45年に亘る治世においては数々の危難に会うが、治世当初の、メアリー時代の残滓であるカトリックへの対策、これは結局、後のアルマダ戦争 (1588) へと尾を引き国際問題にまで発展すると共に自らの王位を揺がした従妹メアリー・ステュアートMary Stuart (1542-87) に関わる諸事件を引き起した。それは、又、ローマとの間の緊張をもたらすことともなり、1559年、「首長令」を発しイギリス国教会の確立に努めた。

こうした国家の危機に対処するためにエリザベスの態度は、慎重かつ曖昧とも言える巧妙なもので、それは、時に、側近であるセシルをも悩ますものであったが、彼女の政治は大局においてセシル等の輔弼を得て間違いのないものであり、そこには、セシルを始めとする数々の人材が適所に配され、それぞれの職務を果たしたからだと言えるし、それは、アルマダ戦争に際しての人々の動きについても言えるのである。

1588年、スペイン無敵艦隊Invincible Armadaがイギリスを襲った時、エリザベスは55才となっており、「ケンブリッジ・グループ」の多くが世を去っていたが、それでもセシルは残り総理大臣格の大蔵卿として相変らず忠勤を励んでいた。

エリザベスの近くにありその政治を輔弼した者達の多くは、時代の風潮であるルネサンスの人文主義を身につけた開明的教養の持主であり、それは彼女自身にも言えることである。固より、そうした開明的な者達ばかりと言うわけにはゆかず、彼女の周囲で起った諸事件には封建性の残滓とも言うべきものを払拭できなかった名門貴族も関わっていた。そうした意味で、ヘンリー8世が、好むと好まざるとに拘わらず、イギリスを近代化させたとは言え、古い体質は随所に見られたのである。

併しながら、大勢は、今や地動説、地球々体説が当り前のものとして受け入れられていた

のである。イギリスは、エリザベスの暗黙の了解のもとに私掠船によるスペイン船の略奪を行わせ、それは、時には、表向きはともかくとして、彼女自身が出資して行かせた面もある。

こうした私掠船で活躍していた者達にジョン・ホーキンス Sir John Harkins (1532-95) やフランシス・ドレーク Sir Francis Drake (1545頃-96) 等がいる。ホーキンス⁽¹¹⁾は海港都市プリマス、そこは、漁業で栄えていたが、探検、私拿捕、密輸、海賊等の根拠地として、当時の海港都市が持つ全ての要素を備えた代表的存在であったが、その名門の出身で、貿易で成功した一族にならない若くして航海に従事、30才の時、資金援助を受けアフリカ西岸でポルトガル人から奴隷を買いつけ、それをアメリカのスペイン植民地で売り莫大な利益をあげた(1562)。当時、アメリカでは人手不足から奴隷が必要とされていたがポルトガルの独占で、この奴隷貿易にイギリス人として初めて乗り出したことになり、最初の成功で、2回目の航海が準備され、そこにはエリザベスの持ち船も含まれ、1564年に出発、ポルトガルの独占をかいくぐってのことであり、又、安価に提供したと言うことで植民地のスペイン官憲の黙認の下での行為だったため危険ではあったが、報酬は大きかった。1568年、3回目の航海の帰途、嵐を避けて寄港したメキシコのサン・ファン・デ・ウロアでスペイン艦隊に襲われ、エリザベスから貸与された船を失う被害を受けた。これは、スペイン総督が騙し討ちにしたためと言うことで、イギリス国内では反スペイン熱が上がり、女王が国内のスペイン人の財産の没収を命じたため両国で報復行為が繰り返された。ホーキンスは、以後、陸に上がり、女王より海軍の出納長官に任命され軍艦建造と王室海軍の改編に当りアルマダ戦争を迎えるのである。

ホーキンスの3回目の航海に同行した、遠縁に当るドレーク⁽¹²⁾はデヴォンシャ出身で、家が貧しかったため少年時代より船に乗っていたが、ホーキンスに誘われて参加、その商売の面白さと共に命からがら逃げたと言うことからスペインへの対抗心を燃やすようになった。そこで、女王からの特許状を得て二隻の船でプリマスを出港、パナマ地峡のスペイン植民地を襲い莫大な戦利品を獲得して帰国(1572-73)。これによって宮廷内からも出資者が出る程だったが、セシルの平和外交により一時停止する。再び、両国の間が悪化するや、ドレークは、その美貌を以て女王の寵臣となり大法官となったとされるクリストファー・ハットン Sir Christopher Hatton (1540-94) を始めとする者達の支持とエリザベスの黙認の下、1577年11月、プリマスを出港、太平洋岸のスペイン植民地を荒し回り目的を達成、帰国の途につこうとしたが、スペインの待ち伏せを避けるため西行、1580年9月、帰港、結局、イギリス人初の、そして、マゼランの一行に次ぐ世界周航者となった。その後、プリマス市長になったが、再び海上に乗り出し、対スペイン熱を燃やしその植民地を荒し回った。

こうした彼らの行動が海賊行為なのか、合法的なものなのかを判断することは難しい。古来、商行為と略奪とは表裏一体をなし、彼らのそれも解釈の仕方でも如何様にも見方が変わる。

少なくともイギリス国内では朝野をあげて成功を歓迎と共に失敗に対する反スペイン感情の高揚は、当事者としては、自らの冒険心を満足させると共に、国家的事業を行っていると考えたとしても不思議ではない。そして、そこには彼らのもたらす莫大な利益を計算に入れてのことであり、それはエリザベスとて例外ではなかった。そこで、ホーキンスにしてもドレークにしても国家に多大な貢献をなしたと言うことで、貴族にはなり得なかったが、ナイトに叙せられ、女王の特許状、行政の枢要の地位にいる者達、それは、ハットンでありレスター伯ダッドリーであり、更には、セシルの片腕として諜報網を組織して内政に外交に辣腕を振ったフランシス・ウォルシンガム Sir Francis Walsingham (1530頃-90) の後ろ立てがあったと言うことからすると明らかに国家事業と見なすことができ、宣戦布告なき戦争と言うことができる。従って、この後起るアルマダ戦争はこうしたイギリスへのスペインの報復と言えるのである。固より、大義名分とも言うべきカトリックとプロテスタントとの対立と言うことはある。そして、ホーキンスとドレークは、戦争に際して、共に副提督として、エフフィンガム男爵チャールズ・ハワード Charles Howard, Baron of Effingham (1536-1624) の下で活躍する。

こうした彼らに刺激されて、三番目の世界周航者となったトーマス・カヴェンディッシュ Thomas Cavendish (1555頃-92)、アメリカに植民事業を計画したウォルター・ローリー Sir Walter Raleigh (1552頃-1618) 等の野心家が続出した。そして、言えることは、地動説にしても地球々体説にしても、それらは学問研究の中から出てきた理論であるが、地球々体説を実証した者達は他の目的を持っており、それも海賊的行為と言う、結果的に新理論が実証されたと言うことは歴史の皮肉と言えるのかも知れない。但し、彼らには新しい理論に対する理解があったと言うことは言えるのであり、彼らが意識していたか否かは別にしても新秩序の形成者と言うことになる。

1588年5月9日、リスボンを出港したアルマダは旧カスティリア王国でも由緒ある名家グズマン・エル・ブレノ家の七代目当主で、偉れた行政家として評判の高いメディナ・シドニア Medina Sidonia (1550-1615) 公に率いられ、130余隻の巨艦を含む大艦隊で北上、これに対するイギリス側は数は多いが、正規の軍艦は30隻程で他は海港都市関係者が献納した寄せ集めの艦隊であった。史上、ヘンリー8世が海軍を整備したと言うことになっているのだが。これをチャールズ・ハワードが率い、12月28日、暴風を避けてカレー沖に投錨したアルマダに火船で攻撃、混乱を生じさせ、戦闘は決定的とは言えなかったが、混乱の中アルマダは帰国の途につき、更に、暴風等の危難に会い、帰還できたのは半分以下となっていた。それでも、その後もイギリスを窺う挙に出ている。だが、イギリス側としては、アルマダを追い返したと言うことで緊張はゆるみ、戦勝に湧いた。

これは史上有名な海戦でもあり、フェリペ2世にしてみれば、政略とは言え結婚も考えた

義妹ではあるが、異教徒とも見えるエリザベスを討つため神の大義を奉ずる十字軍としての聖戦であり、イギリスとしては、長年に亘るカトリックの軛からの脱却の意味を持ち、まさに、近代国家への脱皮を意味する重要な出来事であった。もっとも、これを戦ったエリザベスを始め、セシル、ウォルシンガム等、更に、実際に戦闘に参加したハワード、ホーキンズ、ドレーク達がそうした認識をどこ迄持っていたか、もっと身近かな難問としてこれに対処したと言える。これは、新・旧両教徒同士の争いであり、世界史的に新しい秩序が澎湃として起ってきているのを押し止めようと旧勢力も躍起となっているが、結局、大勢には抗し得べくもなかったと言う象徴的な事件と言うことになり、以後、これ迄世界を席捲していたスペイン、ポルトガルに代って大航海時代の第二段階とも言えるイギリス、オランダの進出の足掛りとなった事件であった。そして、そうした歴史の一大転換期に当り、その重要な役割をナイトの称号を得たとは言え、海賊上りとも言ふべき者達に負っていたと言うことは歴史の面白さを感じさせられる。そこにこそ、エリザベスの人材活用の特徴があると言えるのであって、ヘンリー8世は、自分が利用価値があると思えばこれを重く用いたが、ひと度それが薄れると弊履の如く捨て、剩え、処刑すると言う冷酷な面があったが、エリザベスには、利用はするがこれを切り捨てると言うことは感じられず、彼女のリーダーシップもあるが、周辺の者達が彼女を支え、それが治世中に起った危難を救ったと言える。二人は親子でありながら両極端とも言える様相を呈しているが、男と女の違いと言うこともひとつ言えるけれども、ヘンリーには国を思う面とは別に、自分を前面に出したいと言う自己顕示欲求の強さを感じさせられる。これに対し、エリザベスには、国の在り方と共に自分の存在があると言う面が感じられるが、果して、そうした見方が正しいと言えるか、にわかに断定しがたいが、今のところ、そうした見方に妥当性があると言えそうである。

結

以上、ルネサンス、宗教改革、地理上の発見（大航海時代）との関わりでイギリスに近代化をもたらしたチューダー朝を眺めてきたが、地理的にヨーロッパの端にあると言うことで、近代以降の歴史では他国の侵略を受けることなく来たことのひとつの理由として、カトリックの軛から脱却して完全なる国民国家になったことが大きく介在していると言えよう。そして、その転換期に当たったのがチューダー朝であり、この王朝で大きな役割を果たしたヘンリー7世、ヘンリー8世、エリザベス1世、特に、本稿ではヘンリー8世とエリザベス1世の人材活用に焦点を当てて考察を加えてきたわけであるが、共に人使いが上手だったと言えそうである。ヘンリーの場合、国家的大事件でもあった男子の後継者を得たいと言う自分自身の強い願望を飽く迄も押し通し、その目的達成のために多くの人間を利用、彼自身にしてみれば

ば目的を達成したと言うことで活用したと言うことになる。時に、恐怖を与えながら。従って、そうした中にウルジーのような存在が出てくるのであって、クロムウエルも前任者の轍を踏まないように注意を払ったのであろうが、結局は運命を共にするということになってしまい、後のセシルに見られるような官僚政治家を育成して国家を組織的に運営して行こうと言う気配を感じさせない。その点で、国家と言う言葉が当てはまるかどうか疑問が生じるのである。

エリザベスは、セシルを任命する際、野心のない廉直な性格を見込み、自らの信念に従って助言してくれることを求め、彼もそれに応え、時々、女王に苛々させられることはあっても職務を全うした点は、正に、近代国家としての特徴を示す官僚の誕生をここに見ることができる。そして、官僚の持つ側面としての長きに亘って職務を遂行すると言うこと、それは周囲の人間の協力によって可能であり、彼の中にはそれを見ることができると言うことができるが、それは、エリザベスの彼に仕事を任せようとする姿勢の故にであると言うことができるのであろう。

以上、父娘二人の君主の人づかいを比べてみて、近代国家形成と言うことを人材活用と言う観点から眺めた場合、エリザベスのそれは父とは比較にならないものであり、後の、「君臨すれども、統治せず」と言う君主の在り方の原点をそこに見る思いがする。

注

- (1) Disraeli, B., *Sybil or Two Nations*, Longman, Green, and Co., 1848, p. 188.
- (2) ①Edited by Sir Leslie Stephen and Sir Sidney Lee, *The Dictionary of National Biography* vol. IX, 1973, Oxford University Press, pp. 520-527. (以下, D. N. B. と略す)
②Routh, C. R. N., *Who's Who in Tudor England*, Shephard-Walwyn, 1990, pp. 3-9.
- (3) ①Williamson, J. A., *The Tudor Age*, Longman, 1991, pp. 58-60.
- (4) ①D. N. B. vol. III, pp. 1199-1212.
②二人の結婚生活は、1525年迄は幸せなものだったと言われている。Routh, op. cit., pp. 41.
- (5) ①Williamson, op. cit., p. 42.
②Caspari, F., *Humanism and The Social Order in Tudor England*, Teachers College, 1968, p. 47.
③エラスムスは1499年に、王位に就くであろうヘンリー（8才）に対し手紙で助言を与えると共に、1513年（ヘンリー8世22才）には、真の友情の在り方について手紙を出している。Edited by Hillerbrand, H.J., *Erasmus and His Age Selected Letters of Desiderius Erasmus*, Harper Torchbooks, 1970, pp. 28-29. & pp. 63-64.
④D. N. B. vol. IX, pp. 527.
⑤Pickthorn, K., *Early Tudor Government Henry VIII*, Octagon Books. inc., 1967, p. 9.
- (6) ①D. N. B. vol. XXI, pp. 796-814.
②Routh, op. cit., pp. 58-65.
③Guy, J., *Tudor England*, Oxford Univ., 1988, pp. 83-115.
④即位直後のヘンリー8世は国務に対して興味がなく受容力に乏しかったため政治向きのこ

とは側近, 特に, ウルジーに任せただので, 彼は1512年以降イギリスの政治にとって重要な存在になっていた。Pickthorn, op. cit., pp. 9-10.

(7) ①D. N. B. vol. V, pp. 192-202.

②Beckingsale, B. W., *Thomas Cromwell Tudor Minister*, The Macmillan Press LTD, 1978,

- ・父ウォルターは生活のため, 湯のし屋, 鍛冶屋等の仕事をしていた。p. 10
- ・クロムウエル自身, アイデアを持つことと金を手に入れることに専念する一方, エラスムスが出版したばかりのラテン語新訳聖書を手に入れ, それを読み, その精神を学んだ。p. 13.
- ・彼の個人的興味は政治, 歴史, 神的なもの, 法律であり, 人文主義者達の論題に多大な関心を示し, ペトラルカ, カスティリオーネ, マキアヴェリに傾倒, 彼らの現実主義をその政治的手腕の中に取り入れたいと願望していた。p. 7.
- ・だが, 彼にはウルジーやモアのような学究的特徴(学歴)はなかった。p. 10.
- ・そして, テューダー朝の他の政治家, ウルジーやセシル等と比べるとその政治生命は短かった。p. 10.

(8) ①ウルジーは, 史上有名な政治家, 例えば, セシルのような者達と比べはるかに大きな権力を持っていたが, それはヘンリー 8 世と言う唯一の源泉からのものであって, それは, 王の寵愛によるものであった。Pickthorn, op. cit., pp. 9-10.

(9) ①エリザベスがセシルを任命するについて, 彼が如何なる買収にも応じない廉直で信念の持ち主であることを評価したからである。Black, J. B., *The Reign of Elizabeth 1558-1603*, Oxford At the Clarendon Press, 1976, p. 8.

②上記の如きセシルの性格をエリザベスは以前から承知していたので, 即位するや即座に彼を任命したのである。Williamson, op. cit., pp. 248-249.

(10) ①D. N. B. vol. III, pp. 1315-1321.

②Routh, op. cit., pp. 207-213.

③Locker, R., *Tudor and Stuart Britain 1471-1714*, Longman, second ed., 1985, p. 150.同頁で, ケンブリッジが大司教のみならず世俗の最高の助言者を与えたと, ケンブリッジの役割りについてふれている。

④女王の大臣の中核をなす者達は全てケンブリッジの人間である。Caspari, op. cit., p. 269.

⑤当時, オックスフォードにしてもケンブリッジにしても正規の学位を得ない者も出席していた。Guy, op. cit., p. 269.

(11) ①D. N. B. vol. IX, pp. 212-220.

②Routh, op. cit., pp. 389-403.

(12) ①D. N. B. vol. V, pp. 1331-1347.

②Routh, op. cit., pp. 405-418.

On the Aristocracy of England (V)

Masamichi MATSUBARA

In the England of the fifteenth century, the nobles struggled with each other for the succession to the throne. These struggles became known as the Wars of Roses.

So, after the wars, for Henry VII, as founder of the Tudor dynasty, the most important problem was to solidify his political base vis - a - vis his rivals.

His successors Henry VIII and Elizabeth I were in the same situation as their predecessor, therefore they had to rely on the use of retainers to help strengthen their political positions.

Retainers, whether they were nobles or not, exhibited their talents for their lords if they had a chance. Then they rose to key posts in the land, and some of them became aristocracy, in line with Benjamin Disraeli's theory of "Real Aristocracy".

In this essay I would like to show how Henry VIII and Elizabeth I used their retainers. It is my belief that Henry VIII used his retainers as vassals to do with as he wanted, whereas in the case of Elizabeth I, she worked more in co-operation with her retainers.